

武庫川臨床教育学会 ニュースレター

2020.12.12 No.6



第 15 回武庫川臨床教育学会研究大会のご案内

本年度研究大会を 2021 年 2 月に開催いたします。積極的な研究発表とご参加をお願いします。昨年からのコロナ禍の中で、私たちの日常生活に大きな変化がございました。こうした変化は、それぞれの実践の場でどのような課題となっているのか、それは援助者に確かに認識されているのか、臨床教育学の視点から、参加者のみなさんと共に考えていきたいと思えます。シンポジウム（1）では小林剛先生を偲ぶ集いを、シンポジウム(2)においては様々な対人援助職の方からコロナ禍の現状と課題を問題提起してもらう予定です。お誘いあわせの上、ぜひご参加いただきますようお願いいたします。

◆ 日時 2021 年 2 月 28 日（日） 10:00～17:00（受付 9:30～）

◆ 場所 武庫川女子大学教育研究所

※ 新型コロナウイルスの感染状況とその対応により、近隣の他会場に変更することもあります。

9:30 10:00 12:00 12:45 13:30 15:00 17:00

受付	自由研究発表	休憩	総会	シンポジウム (1)	シンポジウム (2)
----	--------	----	----	---------------	---------------

◆ 参加費：会員、準会員、武庫川女子大学の学生・院生は無料。非会員は 1000 円。

◆ シンポジウム（1）「小林先生を偲ぶ」

小林剛先生（初代本学会会長）は、非行問題や不登校・ひきこもりの課題を先生の実践を通してその本質的理解と具体的支援につなげられ、その成果はご承知のように兵庫県立神出学園（不登校の青年への公立の支援機関）の設立に結実しました。先生の多くの取り組みとその根底にある臨床教育学の構想が、本学会の設立や日本臨床教育学会にも影響していることは確かです。先生と協同研究を積み重ねてきた仲間や、先生から指導を受けた武庫川女子大学の修了生からご発言をいただき、参加者とともに小林先生のしごとに触れさせていただきたいと思えます。

※ 小林先生の著作や資料展示も検討しています。

武庫川臨床教育学会

<http://mukogawarinkyo.com/>

〒663-8558

兵庫県西宮市池開町 6-46

武庫川女子大学教育研究所内

電話番号：0798(45)9866

メール：mukogawarinkyo@yahoo.co.jp

◆ シンポジウム（２） 「コロナ禍の“いま”を問う」

教育・保育、医療・介護、家庭など様々な対人援助の実践現場からのコロナ禍の課題を提起していただきます。その後、参会者のみなさんからご意見をいただき、交流・検討をします。

◆ 自由研究発表の申し込みについて

発表時間は 20 分、質疑応答 10 分です。発表申込の〆切は 2021 年 1 月 31 日です。タイトルを添えて、申し込みください。なお、発表要旨提出〆切は 2021 年 2 月 5 日、発表後のまとめの提出は 2021 年 3 月 31 日です。いずれも、E-mail : mukogawarinkyo@yahoo.co.jp か、ファックス : 0798-45-9866 へお申し込みください。

活動報告

◆ 第 2 回理事会・事務局会議において春木美治会員に事務局に加わっていただくことを確認いたしました。

◆ 臨床教育研究懇談会が、12 月 19 日(土)午後 1 時～3 時、武庫川女子大学教育研究所 306 号室にて開催されます。本学会の岩崎久志会員の講演会です。先着 30 名です。

◆ 3 つの研究会を立ち上げます（責任者 = ○）

すべての理事・事務局員が担当し、年 1 回程度の開催をする。それぞれの問題関心を語りあったり、文献研究をしたりなど多様な形を模索し、会員が自由に参加できる公開研究会を基本とします。ZOOM 会議など工夫しながら、ゆるやかな楽しい研究活動を継続化します。大会から大会までの 1 年間の中間研究会に位置づけるものとして具体化しました。2 月の大会でさらに詳細を報告します。

- ① 援助者職養成研究グループ（ ○吉岡 長谷 渡邊 二羽）
- ② 援助・教育実践研究グループ（ ○中村 福井 高橋 吉益）
- ③ 人間の発達・成長・回復ナラティブ研究グループ（ ○石井 上田 木田 春木）

◆ 11 月 7 日開催の学習会の報告

渡邊理事から「生活綴方教育の実践記録を読みあうことを、教員を目指す学生の学びにどうつなげるか」と題して実践報告・問題提起がされました。東大阪大学の 5 年間の大学教育実践について具体的に語られました。企業人・保育者・教育者など多様な就職希望をもつ学生が集まるゼミナールの性質上、学生に共通する問題意識をつかむのが困難であったこと。そこで、丹羽徳子実践を読みあう意義を見つめ直し、読みあいの一時中断を経て再開したこと。今、教師を目指す学生が教育実践記録を読む意義は何か、自らの大学教員としての学生理解はどうなのか。実践的事実に基づく問いを提示されました。討議の中では、大学教育の意味、子ども理解と教師の成長、どのような教材を発掘するのかなどの角度から深い意見が交わされ充実した時間となりました。

編集後記

今回のニュースレターは第 2 回理事会・事務局会議で論議しました第 15 回大会の内容と、大会と大会をつなぐ中間的な研究会の方向についての特集です。学内学会として発足したこの学会が地域にねざす粘り強い活動を今後展開する意味で大切な方向が決められたと思っています。シンポジウムは小林剛先生を偲ぶ集いと、コロナ禍の臨床教育学会について考えあう場を設けることにしました。コロナ禍のなか、何がかわろうとしているのか、何をかえてはいけないのか、あらためて臨床教育学とは何かという原点が問われています。前回からのシリーズの「臨床教育学と私」、今回の二名の論稿を味わいながら思索を深めたいと思います。みなさんの積極的投稿をよろしく願いいたします。〈文責:吉益〉

シリーズ：私と臨床教育学 ③

私にとっての臨床教育学

木田 重果

私が「臨床教育学」という言葉と出会ったのは、教師として勤務し始めてすぐの時期、武庫川女子大学に夜間大学院があり、臨床教育学が学べると知った時でありました。私は大学卒業後、民間企業に就職し、通信課程で教員免許状を取得後、教職に就きました。教師になったときから、もう一度しっかり教育について学びたいという思いを持っていたため、武庫川の存在に目が行き、臨床教育学という現場に即した学問を学べるという点で魅力を感じていました。初任校に 7 年いて、最初の転勤をしましたが、勤務先が武庫川女子大に近い中学校でした。何かご縁を感じ、入学を決めたのです。

私が臨床という言葉に惹かれるのは、教育と臨床、教師と臨床が非常に近い位置にあると感じるからです。臨床とは死に直面する人のすぐそばにいて、寄り添うこと、つまり当事者の傍らにいて、その人の生活、人生に直接関与することです。教育に当てはめると教師が生徒のすぐそばにいて、生活そのものに関心を寄せ、人生に影響を与えるものと言えます。そう考えると教育はどこまでいっても臨床でなければなりません。また、私は教育の最大の資源は教師にあると考えています。どんなに立派な教材や優れた教授法があったとしても、子どもにとっては「何をどう教わるか」より「誰に教わるか」が重要です。中村雄二郎さんは、『臨床の知とは何か』の中で臨床の知を科学の知と対比させ、このように述べています。「科学の知は、抽象的な普遍性によって、分析的に因果律に従う現実にかかわり、それを操作的に対象化するが、それに対して、臨床の知は、個々の場合や場所を重視して深層の現実にかかわり、世界や他者がわれわれに示す隠された意味を相互行為のうちに取り、捉える働きをする」（『臨床の知とは何か』中村雄二郎 岩波書店 1992）そして、科学の知が仮説と演繹的推理と実験の反復から成り立っているのに対して、臨床の知は直感と経験と類推の積み重ねから成り立っていると書かれています。昔から今までも日本の教師は自らの実践の中で、臨床の知を養い、素晴らしい教育をしてきています。残念なことは、このような視点で教師を価値づけることが少なくなってきたことです。

ものすごい勢いで変化が起きています。今年度から小学校で本格実施となった学習指導要領下では、教師に直接かわるものだけでも、授業観の変容、それに伴う学習評価の変更、外国語教育やプログラミング教育といった新たな教育。さらに GIGA スクール構想に基づき、一人一台タブレットが生徒に与えられるために、その対応も求められてきます。教師は十分な検討なく、日々教育活動に従事していくこととなります。子ども不在の教育にならないかと危惧しています。

私に与えられている仕事や役割を通して、臨床教育学の意義や素晴らしさを伝えていきたいと考えています。

シリーズ：私と臨床教育学 ④

私と臨床教育学

長谷 範子

1. 臨床教育学との出会い

私が臨床教育学と出会ったのは、ある日の新聞記事でした。武庫川女子大学に、社会人を対象とした独立の大学院が新設されるというものでした。主には教員を対象として学校における不登校やいじめといった現象について研究するということでしたが、大学で福祉を学び保育所に勤務して 10 年、子どもの発達について改めて学びたいと考えていた私にとって、教育、福祉、心理を学際的に研究するという臨床教育学はとても興味深いものでした。縁あって 1 期生として入学し、家族や同僚の援助を得ての 10 年ぶりの学びは、先生方からはもちろん、同期の多様な職種の方々からの学びも含め新鮮で、充実したものでした。何より、院での学びが翌日の保育における子ども理解を助け、子ども一人ひとりの行動がより興味深く、子どもとのかかわりを楽しくしてくれました。研究科長であり、指導教官であった祐宗省三先生が言われた「あなたが伝えたということと、子どもが理解したということは違います。子どもの行動をよく見なければ、本当に伝えることが出来たのかどうかはわかりません。」という言葉は、日々の保育を振り返る私の視点となり、それは、現在の保育者の養成教育においても大切な視点です。臨床教育学研究科での学びが、子どもや保護者、学生とともに「在る」という立ち位置の土台となったのだと思っています。

2. 臨床教育学との新たな出会い

院を修了後 10 年間の保育者としての日々は、子どもだけでなく保護者との関係も含め、関係性の中で理解を深め援助するというところにゆっくりと取り組むことが出来たと思います。その後大学における保育者養成に転じ 10 年、大学組織の課題に悩む中で田中孝彦先生、ゼミの方々との出会いを通し、新たに臨床教育学と出会うこととなりました。それは、保育や教育の中で、援助者と被援助者が双方向の関係を持つということを超え、保育や教育の場面、場面でともに「在る」こと～共通の場を作り出していること～が、援助者とその場に在る子どもや学生を同時に支える、その在り様を考えることが臨床教育学なのではないかと思います。

3. 私と臨床教育学～これから

これからの、予測できない変化の中で生きるであろう子どもたちに、先人の知識を超え変化に対応する力～非認知能力～を育てなければならないと言いだした矢先に、この度のコロナ禍で、今、私たち大人の非認知能力が試されています。今年度大学に入学した 1 回生は、教員の顔も知らず、相談する友人も出来ないまま、オンラインで一方向的に送られてくる課題に戸惑い、お手上げ状態の学生も少なくありませんでした。教員である私としても、個々の学生の特性がわからない中でどのような関わりが安心につながるのか、よく見えない中で伝えるにはどの言葉を選べばよいのか、悩み続けました。後期に対面授業が始まり、学生の表情を見ながら、また学生と直接言葉を交わしながら授業をすることの大切さを実感しています。そして、学生とともに「在る」ことに教員としての自己を支えられている現在の事実から、臨床教育学研究を進めていきたいと考えています。